

青年期の親子関係研究の展望

久世 敏雄 平石 賢二

はしがき

この論文では、青年期の親子関係の研究がどのようになってきたか、どのようになされているかについて記述する。このことは、親子関係の研究が将来どのようになされていくべきか、その展望をすることも含まれる。

青年期は、従来、疾風怒濤の時期としてとらえられてきたという印象が強いのであるが、こうした見解は、今日においてもなお青年についての妥当な視点といえるものなのか、ということについてまず検討する。つぎに、青年期における親子関係の研究は、どのような視点からなってきたか、どのような概念と方法によって研究されてきたかについて検討する。こうした検討と分析をふまえて、親子関係の研究は、最近どのような特徴を示しているかについて考察することを目的とする。

I. 青年期は疾風怒濤の時期なのか

青年期は疾風怒濤の時期であり、動搖の時期であるから、青年期の家族関係、親子関係は緊張と葛藤にみちている、とする一般的な見解がある。

青年の動搖は、気分の動搖、思考の混乱、変化し予測することのできない行動を徵表とする心理的均衡の分裂を示し、深刻な葛藤と両親に対する反抗を示すものとされている (Offer & Church, 1991)。つまり、青年の情緒の状態は、均衡というより不均衡を経験するのが一般的である、とする見解である。

また、多くの著書では世代間のずれについて描いている。世代間では、年齢の差異があるだけでなく、かれらの知覚、価値、態度の間のずれが存在する。こうした記述も、青年期は疾風怒濤の時期であるとする見解と連なっている。

青年期は一般に不安定な時期であり、動搖のはげしい時期であるとする見解は、青年心理学の歴史をみると、Hall, S. (1910) にさかのぼる。ホールは、19世紀のドイツロマン派の著作に影響されており、青年は、成人社会に入るためには情緒的動搖が必要であると考える。青

年の疾風怒濤の現象は、両親から力強く分離するための説明描写といえる。そして、この記述は青年の組織的観察に基づくというより、進化論についての哲学的な信念に基づいている。

青年期では疾風怒濤の親子関係が一般的であるとする主張は、精神分析的見解に明白に示されている。古典的な見解では、思春期に伴う衝動活動が増加すると、青年は成人の性をパーソナリティに統合できるようにバランスをくずすことになる。Freud, A. (1958, 1968) は、質量ともに増えた衝動の変化によってもたらされる不安を押さえるために防衛を考える。青年の激動は歓迎され、必要なのである。青年期は性質からして、平和的な成長を阻止されている。Blos, P. (1971) もまた、青年は動搖を経験する必要があると述べ、青年期を過ぎて統制、制止、評価的な原則を獲得して始めて動搖は緩和されていく。こうした青年描写は、臨床場面での青年の観察によっている。

Freud, A. に続く精神分析学派の仕事では、成熟は葛藤を通してのみ達成されるとする仮定は、その理論で主要な役割を果たし続けている。疾風怒濤は、成長がおこるのに必要な退行のさけられない結果である。疾風怒濤は一般的ではないが、normalな青年の特徴である。

精神分析学派では、葛藤 conflict と detachment の概念を使用して、青年期での疾風怒濤の親子関係を描写しているが、この古典的側面に視点をあてた多くの文献がある。これらの評論 (Bandura, 1964 ; Hill, 1980 ; Montemayor, 1983 ; Rutter, 1980) のうち Montemayor (1983) のそれは、もっとも包括的である。

これらの評論は、一般に Montemayor の結論—葛藤的な親子関係は、青年期の典型ではないとする見解、と一致している。

葛藤が生ずるのは、日常の時間、デート、成績、個人的外見、食習慣と家での雑用である。基本的な問題となる経済的、政治的、宗教的、社会的価値の葛藤は殆どないのであり、青年と両親の間でもっとも多い葛藤は、夜

青年期の親子関係研究の展望

帰宅する時間と家での義務である。

こうした葛藤を報告する青年は、15~30%である。Offer & Offerの縦断研究をみると、高校生男子では21%が疾風怒濤の親子関係を示している(Hill, 1987)。

Montemayor自身、青年に電話面接をしているが、この報告では、児童期から青年期にかけて葛藤が増加したりする徴候はない、という。

疾風怒濤の問題は、逆の方法で接近することもできる。青年と両親の関係について肯定的な側面について尋ねることができる。もっとも、密接な関係があったとしても、葛藤の経験はありうるので、青年期の親子の疎遠はおこりがちである。仲間と過ごす時間が多く、親と過ごす時間は少なくなるのであるが、利用できる情報によると、青年は一般に、両親への肯定的認知と情緒的方向づけを維持しているという結論と一致する。

大規模な調査研究をみても、多くの青年は、親に対して親密感をもち尊敬していることを示している(Bandura & Walters, 1959; Douvan & Adelson, 1966; Kandel & Lesser, 1975; Offer, 1969; Rutter, Graham, Chadwick, & Yule, 1976)。家庭生活に幸福であり、満足している(Meissner, 1965)。親子の結びつきはうまく概念化されておらず、Bowlby的愛着として研究されているわけではないが、文献をみると、肯定的なsecureな愛着は、どのように変容しても青年期をこえて持続することを示唆している。

葛藤、反抗、アンビバレンツ、脱理想化 deidealization が精神分析学派の主張するように標準的な青年の特徴とするならば、そして autonomy の達成に必要であるとするならば、autonomyの徴候は、肯定的な尊敬より親への否定的な方向づけ—detachmentあるいは反抗と関連すべきである。Kandel & Lesser(1975)の研究をみると、この考えに否定的である。独立を認められているという感情は、親との肯定的な相互作用と関係している。

さらに、青年が両親と仲間から否認されると予期する事態についての研究では、多くの青年は、両親の否認が友だちと仲たがいするより受容しがたいことを示している。

また、両親は、10代の青年の基本的な価値にかなり影響力をもち続けている。青年は、基本的な価値の問題で親と一致している。価値の葛藤より、親と価値を共有している、と報告されている。

これらの記述は、親子間の葛藤は青年期の典型ではないとする一般的な見解を支持するものである。この時期の親子間の描写は、どのようにされているのかみてみよう。

一般的にいえば、経験的には、青年期とくに初期青年期の研究では、家族の結びつきが再調整されることを示している。疾風怒濤の考えは否定されているが、親子関係の変容が初期青年期に起こっていることが指摘されている。親子関係の動搖などが起こるのは、青年の思春期的、身体的变化と認知発達などによる。しかし、この動搖は、親子の結びつきの情緒的凝集性をおびやかすものではない、とされる。この時期の青年の家族との結びつきは、青年の detachment の証拠とはいえないものである。

青年期は疾風怒濤の時期とする見解、疾風怒濤の親子関係の時期とする見解は、このように、アメリカの青年心理学では否定的である。このような見解は、恐らく世界的な傾向であろう。もし、このような視点が一般的であるとするならば、青年(日本の青年を含めて)についてのより穏やかな、中庸の model をどのように求めていったらよいのか、どのようにつくりあげていったらしいのか、ということが改めて問われることになる。青年理解の新しい理論が待望されている。

II. 青少年期の親子関係の研究

青年期とくに中期から後期にかけての親子関係の主要な課題は、独立と togetherness の交渉 negotiation である。これらの次元は、独立—autonomy, individualization, separation, disengagement, togetherness—attachment, connectedness, dependence, などうまく区別することの難しい概念が使用されている。もっとも、本来、青年期の親子関係の研究は、青年一両親間の独立と togetherness の発達ないし individuality と connectedness の発達を検討することであろう。

疾風怒濤の青年観に立脚すると、親子関係の研究は、青年の親からの独立 independence oriented、親なし社会からの自由 freedom from、といった側面が強調される。独立の定義としては、主観的な autonomy についての自己報告、青年に影響する家族決定への参加の自己報告、個人的決定の自信、親に是認されるものと仲間に是認されるものの間の二者択一の選択などである(Hill, 1986)。

これらの独立の定義では、親からの分離、さらに社会的(主として親)影響からの自由という暗黙の概念を含むものである。

上の概念で強調するのは、独立への要求が青年期の特徴である、ということであり、親子関係は以前の親との関係と影響から自由になる方向への変化を意味している。

～からの自由という概念は、青年の心理的な過程を表

わすものではあるが、親の心理的過程を表現しておらず、両者の関係は未知のままである。

独立を強調する概念は、自由が生じたときに残存し、維持されているものを記述することに欠けている。関係がどのように生じ、変化していくかについての記述はみられない。

関係の非連續性 青年心理学の領域でなされてきた親からの独立、さらに心理的離乳の概念は、こうした色彩が濃厚に漂っている。社会学における家族構成の力構造の研究なども同様であり、いずれもこうした青年観を代表するものとなっている。これらの多くの研究では、両親の依存を離れ、仲間から情緒的支持を求め、家庭外の仕事の責任を身につける青年の要求に視点があてられている。

臨床心理学の領域でも、青年期や成人期に顕在化する問題は、親からの分離とかかわることを指摘するが、これらの報告は、特定の集団の選択された標本を対象としたものである。

こうした研究は、いずれも、青年一両親関係の連続性を無視したものであり、児童期から青年期にかけての関係の変化に視点をあてている。

関係の連続性 上述の研究者に対して、親子関係は児童期から青年期にかけて連続しているという主張がある。連続性の視点をとる研究者たちは、親子関係は、一般に子どもから青年にかけてその質において主として調和的、連続的である、と述べている。Offer, Ostrov, & Howard (1981) や Douvan & Adelson (1966) たちの研究は、その代表である。かれらは、大がかりな調査と面接をする。こうした研究では、葛藤を同定する青年の情緒、感情をうまく把握し、説明することは難しい。結果は、方法論的な不自然さによってゆがめられる可能性がある。

このタイプの研究では、青年一両親関係の変化を強調するより、変化を低く評価する傾向がある。

青年一両親関係研究の第1の視点では、青年期の課題は親の影響から独立することであり、児童期にみられる依存から独立への変化が強調される。それに対して、この視点では、多くの青年にとって青年一両親関係の質は、児童期から青年期まで主として連続的、調和的である、とする。

青年一両親関係の研究は、その多くはこの何れかの立場に分類することができる。しかし、ここ10年来の青年心理学ならびに近接領域の研究をみると、両視点を包括する第3の立場が存在することがわかる。第3の立場では、青年一両親関係は変化と連続性がある、とみる。親子関係は、人生周期を通して続く永続的な結びつきが

あるが、それは相対的にいって、一方的権威の型から相互性へと再交渉することによって、初期青年期から成人初期にかけて変容がおこるという考え方である。

新しい視点 この視点からの諸研究は第3節に記述する。ここでは、この関係的な視点と一致する若干の研究をみておこう。Ainsworth (1979) や Sroufe (1979, 1983) たちによって、親子関係の個人差の起源が考察され、愛着は幼児期から児童中期にかけて一貫しているといわれる。また、幼児期、児童中期の探索と自律は、愛着の質と関係している。Baumrind, D. (1968, 1991) は、competence の児童初期、中期における家庭の先行条件を検討し、権威ある親 authoritative parent は、主体的あるいは能力のある子どもを育てる、という。権威ある親は、限界状況を交渉と結びつけ、訓練過程に子どもが寄与するのを奨励する。これらの研究は、家族関係とそこで得られる心理、社会的 competence の関係を理解するのに役立っている。家族関係の質は、青年期の competence の発達に主要な役割を果し続けることを期待されている。

また、仲間関係の研究をみると、児童期初期、中期では、子どもは異なった2つの関係とかかわっている (Hartup, 1979, 1983 ; Youniss & Smollar, 1990)。仲間との間では、子どもは物事の決定に平等に参加する。いい争いの解決は、交渉によってなされる。家族では、子どもは親の規準に一致することを期待される。

子どもは青年期に近づくにしたがって、仲間関係と親子関係で変化が生ずる。友情では、自分に似ているもの、異なっているもののいることを理解する。これは他人とは類似と差異のあることを知る枠組みとして役立つ。親は、子どもを監視し、導き、評価し続けるが、初期青年期では、子どもは親に対して仲間と同じような関係を模索し始めている (Hill, 1980 ; Youniss & Smollar, 1990)。家族相互作用の研究では、初期青年における自己主張の増加を報告している (Alexander, 1973a ; Jacob, 1974 ; Steinberg, 1981)。初期青年の自己主張の増加については、さまざまな解釈がなされている。

Blos (1971) は、精神分析の枠組みから、家族外に新しい愛着対象を見い出す、第2次個性化 second individuation の表われとみている。

Steinberg (1981) は、動物行動学的視点を援用し、青年期の身体的発達が仲間との支配ー服従的相互作用を生み出す。その関係が家族相互作用の場にとりいれられるようになる、という。

Elkind (1967) は、形式操作的技術が青年に家族の規準や実際の活動を反省させたり、そこから生ずる疑問

を考えさせる、と理解する。

Youniss & Smollar (1990) は、Piaget や Sullivan に基づく関係的視点から、初期青年期では、友だちとの協調的関係と、親との一方向的関係という、自己の属する 2 つの対照的な世界に気付き始めることからおこるとしている。

青年期の主要な課題は、このようにみると、この異なる世界を個人的価値に統合し、家族内外の成人との関係に参加する能力を獲得することである、ということともできる。

以上、青年期の親子関係の研究について、Grotevant & Cooper (1986) を参照しながら記述してきた。かれらがいうように、発達における関係の役割を理解するには、関係それ自体が時間とともに変化する事実と、関係に参加する各成員が時間とともに変化する事実を説明することのできる概念を用いて、関係を理解することが必要である。

本節冒頭で指摘した通り、親子関係の研究は、独立と togetherness の両側面に視点をあてて、その変化を記述することが望まれる。

III. 青年一両親関係の変容過程に関する研究

1. 初期青年期の研究

親子関係は、ひとの一生を通して続く永続的な関係であるが、それは一方向的な権威の型から相互性の型へと再交渉することによって、初期青年期から成人初期にかけて変容するものである。こうした視点に着目して精力的な研究を進めた研究者の一人として Hill, J. P. (1980, 1983) がいる。かれは、1970 年代半ばから青年心理研究に関心を示し、初期青年期研究のリーダーとして活躍し、多くの業績をあげてきた。ここでは、かれの研究を含め、初期青年期の観察的研究をみていく。とくに家族相互作用の観察と microanalytic なコーディングをしている研究について主として述べる。

Ferreira (1963) は、25 組の normal, pathological な家族を対象に家族成員の相互作用について検討している。課題は unrevealed differences technique を用いている。この課題は家族成員が独立にいくつかの質問に答え、それから家族としての選択をする。家族成員の独立の選択については他の成員に知られていない。そうした状況で、家族としての選択決定を求められる課題である。normal な家族では成員間の一致が多く、青年期の初期で pathological な家族より適応的に反応がなされている。

Alexander (1973b) は、非行少年のいる intact 家族と非行少年のいない intact 家族の相互作用の型の差

異に着目している。13~16 歳の intact 家族に revealed differences technique を使って研究したところ、normal な家族では家族組織が統合されるコミュニケーションをしているが、非行家族では、家族組織に統合されないコミュニケーションをすることを明らかにした。Alexander (1973a) は、さらに normal な適応的家族は組織としての統合を維持する成員間の相互的援助のあることを指摘している。

Hetherington, Stouwie, & Ridberg (1971) も非行家族と non 非行家族の親子のコミュニケーションの研究を行なっているが、non 非行家族の成員は、最初から意見の違いを表明することができ、相互に受容的な仕方で自らの立場をかえる柔軟さがあることを報告している。

これらの研究をみると、混乱していない家族では、成員間の相互援助が特徴となっている。課題解決の目標にむかってのこのような相互作用の型がきわどっている。こうした解決への動きは葛藤によってもたらされたものではないので、家族成員間ではどのような過程を経て変容するのかということが、改めて問われる。

Jacob (1974) は労働者階級と中流階級の両親と 11 歳または 16 歳の息子を対象に unrevealed differences technique を使用している。両親は 16 歳の息子の方が中断しやすく、父=息子の一致も多かった。逆に 11 歳の家族では不一致が多かった。ところが、16 歳の息子は、家族としての意志決定で影響力が多かった。息子の力の主張は、11 歳でみられ、葛藤するようだが、16 歳の息子は家族内で地位を得ており、家族はその変化に適応しようとしている。息子の 16 歳での影響力の増大は中流階級では母親を、労働者階級では父親を犠牲としている。

こうして支配 dominance 構造は、中流階級では父=母>息子から父>母→<息子となり、労働者階級では、父=母>息子から不安定な、平等的な父=母=息子となっていく。

初期の横断的研究 (Steinberg & Hill, 1978) を発展させた縦断的研究で、Steinberg (1981) は青年期男子の思春期的地位の変化が、構造化された家族相互作用課題での家族行動の変化と有意に関連していることを見い出した。思春期の頂点で、母は息子に多く中断した。思春期的発達が進むにつれ、息子が母に中断した。母のいうことをきかず、母と息子はお互いに説明しなくなつた。思春期の頂点後で母は息子にしたがつた。

成熟するにしたがって、息子は父に中断しなくなり、従順になった。父は息子を中断させ、息子のいうことをきかなかつた。

母=息子の相互作用の結果は、初期横断研究の結果を

確認したものとなっている。すなわち、一時的な動搖が、思春期的成長の頂点のとき、あるいはその近くで母一息子関係で生じている。

父一息子の相互作用の結果は、若干異なっていた。横断研究では母一息子の結果に近かったが、縦断研究では、父の増大する支配と息子の服従で一貫していた。Steinberg が指摘するように、靈長類での支配行動を説明するのと一致しており、男性は成人の地位に近づき始めると女性に敬われ、かれより高い地位の男性を敬うようになっている。

Hill, Holmbeck, Marlow, Green, & Lynch (1985a, 1985b)は、7年生の子どもとその家族を対象とした field に基づいた研究で、思春期的地位の函数として葛藤的な関係がみられるかを検討した。結果は、Steinberg & Hill (1978), Steinberg (1981) と類似している。思春期的成長の頂点のとき、母一息子関係は、家族の rule, 規準（子どもの報告）、子どもの対立（母の報告）はもっとも高く、家族の活動（母の報告）、親の満足（母の報告）はもっとも低かった。父一息子では、葛藤が少なかった。

娘に関する研究では、思春期的地位は、月経が始まっていない、6ヶ月以内に始まった、12ヶ月以内に始まった、1年より以前に始まった、のいずれであるかについて確認した。家族内の規則と標準、親の受容、家族の活動、親の影響の混乱は、月経後6ヶ月に生ずるようである。しかし、月経後12ヶ月のグループでは、平均は月経の始まっていないグループと同様である。娘が一年以前に月経を経験した家族では、変数の平均は6ヶ月前のグループと同じようである。こうした結果をふまえて Hill と Holmbeck たちは、月経が1年以内に生じた、比較的適時の娘では、息子の二次的関係と類似するが、娘が早熟のとき、混乱は一時的でなく続くのかも知れない、と推論している。これらの結果を一般的にいえば、親子関係の一時的動搖は、思春期的成長の頂点で生じ、そのような葛藤は、初期女子青年では持続するかも知れないものである。

さて、初期青年期における家族員の相互作用の型の変化の研究から、若干の点を指摘することができる。

まず、男子青年では、支配一服従の型におこる変化によって、自己主張が家庭内で強化されるが、女子ではこうした変化を観察することができない。つぎに、少なくとも実験室的交互作用の状況では、極端な葛藤は、normal な家族の特徴とはならず、思春期と月経に関連した家族関係における動搖の一時的性質である。最後に、初期青年期の観察的研究では、家族関係の変容は個人内というより家族 system 内の交互作用から生ずること

を示唆している。Hill が指摘しているように、これらの変容が初期青年の autonomy の増加の徵候である限り、この研究成果は、autonomy は社会的世界で発達するのであり、個人内心理現象ではない、とする考えを支持することになる。

2. 家族の相互作用の過程が青年の competence に果たす役割の研究

家族関係の研究始め、近接領域での最近の研究をみると、個人発達の文脈としての家族関係の役割に焦点があてられていることがわかる。青年が家庭から巣立ち始めるとき重要とされる competence の側面、例えば identity 形成の個人差への家族内関係の貢献が明らかにされつつある。この種の研究は、子どもから青年になるにしたがって、親子が平等な関係に変化していく際の交渉とかかわっている。さらに、青年の identity 形成の個人差は、関係的な経験に基づきをもつことを明らかにすることができるので、重視されるべき視点といえる。

individuation とかかわる研究 この種の研究は、1980年代初めから Grotevant と Cooper たちによって精力的な研究がなされている。かれらも、家族関係に individuation の概念を導入し、individuation の役割を model 化している。

individuation は、家族員から派生する二者関係の質と定義され、他者との individuality と connectedness の間の相互作用の中にみられる。individuation の概念は、分析の関係的ならびに個人内水準を記述するのに用いられてきた (Grotevant & Cooper, 1986)。Mahler ら (1981) は、individuation は、よちよち歩きの幼児が親に対して individuality を主張する中に反映されると考える。Blos (1971) もまた、青年期を第2の individuation の時期と捉える。両親との幼児的な対象関係からの解放を果たすのに必要な時期である。Blos は individuation を両親から離れる過程として、分離した個人となることに関連させて使用する。

関係の質としての individuation の model を発展させるにあたって、Grotevant たちは individuation と愛着の研究に依拠する。その多くの研究は、個人と家族の機能の徵表として、individuality と connectedness の継続的な相互作用を示すことを指摘する。かれらは、すべての関係の中核に、individuality と connectedness の2つの次元の相互作用があり、これらの性質で異なる個体の体験は、家族の文脈をこえて発達に影響するものと考えている。

individuation は、individuality と connectedness を反映する家族員間のコミュニケーション行動によっ

て操作される。individuality は、さらに自己主張 self-assertion と分離 separateness に、connectedness は相互性 mutuality と滲透性 permeability に反映される。

自己主張は、自己の視点からそれをはっきりコミュニケーションすることである。分離は、自己と他者の差異を述べる能力であり、これは情緒的成熟の徵表とみられる。

相互性は、他者の視点（信念、感情、考え方）に感受性を示し、それを尊重することである。他者の要求に敏感で、それを援助する能力は、家族健康の中心的特質とみられる。滲透性は、他者の考え方への応答性ないし開放性である。他者に承認を与え激励することである。

84組の家族の相互作用が、成員の表出と協調をひき出すように工夫された家族相互作用課題で観察される。

家族関係における individuation の model が提示され、青年の competence の発達と結びつけられ、家族成員間のコミュニケーション行動が分析されたとき、identity 探求の高い青年は、相互性と分離を表す父、滲透性の低い母、自己の分離と滲透性を示していた。(Grotevant & Cooper, 1986)

White, Speisman, & Costos (1983) は、子どもが青年期から若い成人期に達するときの、親子関係の発達を理解するための individuation の model を提出する。この model によると、青年一両親関係の最初の段階では、親から分離を確立しようとする青年の autonomy を強調する。最終段階の仲間のような相互性への発達的進展は、若い成人の親への視点の増加と親がかれらを見る正確な知覚の増加によってなされている。かれら (White, Speisman, Costos, & Smith) は、親子関係成熟の水準を面接を通して査定する。individuation と愛着の包括的研究を行い、自己に焦点づけられた self-focussed 関係の段階、役割に規定された role-focused 関係の段階、さらに individuated-connected な関係の段階の、親子関係の 3 水準を記述している (Hill, 1987より引用)。

Hauser, Powers, Moam, Jacobson, Weiss, & Follansbee (1984) は、精神科治療群（入院患者）と正常者を対象として、家族の相互作用の型と青年の自我発達の研究をしている。かれらは、constraining と enabling に視点をあてた親子の相互作用のコーディングスキームを工夫している。Loevinger (1976) の概念に影響される自我の発達は、家族の enabling 行動（説明、受容、共感）とプラスに、constraining 行動（判断すること、気を散らすこと、けなすこと）の多くとマイナスに関係していることを明らかにした。

これらの研究は、individuality と connectedness

が交渉される継続的な親子関係内の個人的発達に焦点があてられている。

その他の研究 つぎに individuation の術語は使用しないが、家族の相互作用と青年の identity の関係を検討する研究をみよう。

Matteson (1977) は、デンマークの21家族の標本について家族成員の相互作用と identity status の関係を検討している。モラトリアム青年の家族では、両親は息子に autonomy と自己表出を奨励しており、家族成員は unrevealed differences tasks での相互作用に積極的である。早産型の青年の家族では、より課題志向的であり、父は明らかに支配的である。拡散型青年の家族では、両親は青年の参加を奨励しないので家族相互作用は受動的である。

Bosma & Gerrits (1985) も家族機能と青年の identity 達成の研究をする。青年の autonomy、青年の autonomy に対する両親の態度および成員間の会話時間の割合の、家族相互作用の 3 変数が、27 家族の問題解決課題における観察から得られた。そして、青年の identity status と関係づけたところ、青年の autonomy、家族の対話は全体としての identity status とくに identity 探求（危機）などと関連していることを報告している。

Murphy, Silber, Coelho, Hamburg, & Greenberg (1963) の研究では、面接に基づいて青年の autonomy と relatedness が評価されるが、これらの高い青年の両親は、子どもが autonomy を発達させることができるような場面を与えることができる。必要ならば限界をつくるが、世の中を危険な場所とみず、青年が自己決定し、決定の結果を経験するように奨励する。夫婦関係と子どもの間の境界は、はっきり区別されている。

社会化に関する文献をみると、家族の相互作用と青年の competence の関係に視点をあてた論文を収集することは、さして困難ではないことがわかる。

ここで報告した研究は、青年の心理社会的発達における家族の相互作用の役割に関するものである。これらの研究は、多様な方法に基づいてなされているが、それにも拘らず、齊一性のある証拠を提出している。individuation に視点をあてた諸研究では、青年期の変化する親子関係を概念化し、査定する方法がユニークである。前項 1. で扱った諸研究は、autonomy の研究として一括することができるが、それだけでなく individuality と connectedness の術語で概念化している。また、第 2 のグループの社会化研究では、家族の関係の質と identity status の発達の明瞭な関係を明らかにしている。青年に特徴的な見解をもつように親が奨励するこ

と、差異を喜んで許容することが、identity 探求とかかわっている。

親子関係は、子ども時代から若い成人へと進むにしたがって、親子の影響が相互に symmetry へと変化していく関係である。Grotevant らは、individuation の model をコミュニケーションで観察できる二者関係の質として提案し、家族関係における individuality と connectedness がともにみられることが identity に関連した選択を探索する青年の能力と関係することを明らかにした。この結果は、なお慎重に吟味することが必要であるが、多様な研究から支持されていることがわかる。

3. 親子一仲間間の文脈とかかわる研究

青年期では、一般に仲間関係の重要性が高まり青年の行動発達への影響が増加する社会的関係の再構造化が生じる、といわれる。こうした背景から、親子関係と仲間関係の関係に関する研究は、なされてきた。初期青年期では、とくに親から離れ、仲間集団において自律感を発達させるとみられる。そこで研究の key 概念は、conformity の概念であり、仲間モデルへの conformity の程度が問題とされる。仲間とは衣服や薬物使用の style で類似しているが、生涯にわたる価値的な計画（教育目標など）では、親と類似する。1960年代の Brittain (1963) や、その他の研究者の一つのパターンである。ここでは、親と仲間の相対的な比重が話題となっている。

また、青年の社会化への役割に関して中等教育の発展、工業化にともなう社会的 agent の働きを重視する議論もなされていた。青年は成人からしだいに隔離されている。成人文化とは異なった青年文化がある、仲間が家族にかわって社会化に力をもっている、というのである。Coleman(1961)に代表される見解である。

この視点とは、異なる側面もあるが、親は子どもに一方向的影響と統制をする。仲間は、平等の親密な関係である。子どもは、親子と仲間関係の 2 つの異なった世界に住むといわれる。それは、Sullivan の intimate world の記述にもみられる。

青年の仲間との平等な関係は、親との一方向的関係とは異なっている。親子関係と仲間関係は、相互に異なった価値を支持するので、両者の葛藤は確かである。こうした視点では、青年の親と仲間の関係は分離したままである。

Hill, J. (1983) は、こうした研究に対して、1つの研究計画に親と仲間を結びつける研究、さらに社会的技能あるいは competence を介在させる研究の重要性を

指摘する。

最近の研究をみると、家族と仲間関係は 2 つの分離したものとしてとらえるよりは、両者は連続性と相互の影響がある、とする統合的視点に立脚する研究がなされ始めているように思われる。

Cooper & Ayers-Lopez (1985) は、初期青年の仲間関係における家族経験の役割について再考察することを提案する。青年が親密な仲間関係を経験する個人差の 1 つの源泉は、初期青年が家族の経験からもたらす関係の概念と技能であるという。青年の親と仲間の関係を統合すると同時に、青年発達における関係の役割を明らかにする基礎となる、関係に関する 3 つの矛盾しない視点を指摘する。それらは、関係における individuation、社会的媒介 social means による自己の構成、交渉における相互性の能力の発達である。

関係における individuation では、前項で記述した Grotevant らの家族関係における individuation の役割の再確認をする。model の中核は、すべての関係に individuality と connectedness の 2 つの次元の相互作用があり、これらの性質で異なる家族関係における児童と青年の経験は、家族の文脈をこえて（仲間関係を含む）かれらの発達に影響する、というものである。

社会的媒介による自己の構成では、Youniss & Smollar (1990) の知見を紹介する。Youniss & Smollar は、親と仲間の関係を統合する概念の考察に関心をもつ。子どもは、仲間との相互作用から自己に類似するものと差異のあるもののいることを知る。仲間との関係から得た相互性は、技能であり、初期青年は親との交渉にそれを利用すると考えている。また、母親は、青年の仲間との経験を父親に橋渡しする特殊な役割を演ずるものとみる。こうした親と仲間の関係は、individuality と connectedness の異なった individuation を経験する手段を提供するものとみている。

交渉における相互性の能力の発達は、individuation の次元が、青年の親と仲間にに対する関係的な発達水準の機能として異なることを考える枠組を提供すると考えている。関係的な能力は、友情ならびに家族関係とともに自己開示だけでなく、差異を探求し葛藤を経験する能力である。交渉技能 negotiation skills の研究は始まったばかりであるが、Selman ら (1983, 1984) は、対人的 negotiation の方略の発達 model を提供している。この枠組は、青年、両親、仲間の相互作用の質における差異を知る基礎を提供する点で重要である。

これら関係・発達の 3 つの model は、青年、両親、仲間が関係とかかわる方法の差異を理解するのに役立つものである。

こうした視点をふまえた上で, Cooper & Grotevant (1987) は, 家族経験と青年の友情ならびに dating 同一性の関係を検討する。家族経験は, すでに紹介したコミュニケーションの過程に焦点をあてる individuation のモデルを適用し, 家族成員の表出と協調をひき出すよう工夫した家族相互作用課題 family interaction task で観察している。

identity 面接は, Marcia (1966) の Identity Status に準拠するが, 対人的 identity を調べるために発展させている。options を探求した程度, 選択へのコミットメントする程度を査定する。友情と dating の探求は, 青年が考える多様さと styles を扱い, コミットメントは最善の関係の type についての決定の確かさである。

高校生を対象とした結果をみると, 女子は男子より dating の関係にコミットしている。友情と dating 同一性と関連する家族相互作用の型をみると, 女子では, 家族相互作用における分離が友情同一性探求と関係するのに対し, 男子では, 家族相互作用と探求の結びつきはすべて connectedness と関係している。この結果は, gender の反映として理解されている。

こうした親子と仲間の関係を統合する研究は, 今後一層精力的になされることが期待されている。

4. 親子の共変関係に関する研究

初期青年期における家族関係の変容は, 子どもとかれらの社会的環境の変化, ならびに親とかれらの社会的環境の変化から生じている。初期青年期では, 子どもの身体的, 性的変化と周りの成人のかれらの認知ならびにその扱いに変化がみられる。同時に, 初期青年は, 知的, 認知的発達が著しく, いわゆる形式操作的思考とその技術を身につけていく。初期青年は, 自己と社会的に適切な行動の新しい定義をくだし始める。かれらは, 重要な他者ならびにかれらとの関係について, 社会的場面における意図と規準について, 多様な視点から成人がするような仕方で解釈し始めている。家族についての概念, 家庭生活の理想, 行動の原理などの家族内の対人関係と行動について, 児童期よりうまく推論することができる。

この時期の親は, どのような発達的課題と直面しているのであろうか。われわれは, その多くを知らないのである。親は子どもの思春期的变化と対処しているが, この時期の親子関係の変容は, この年代の親が直面する生活環境に影響されている。子どもが初期青年のころ,多くの親は30歳から45歳に達している。中年期にさしかかるとき, 成人は身体的健康に关心をもち, 職業的要求とその達成のずれに悩むことがある。この時期では, 夫婦間の不満足が増大するという指摘もなされる。

初期青年の親の, 比較的若い世代に特徴的な発達的課題に関する情報は少なく, 中年期の親の危機と初期青年への影響についての経験的データは見られないが, 青年期における家族関係の変容は, 自己の生活軌道の変化を経験する親の社会的ならびに個体内変化に影響される。

Hill, J. (1980) は, 青年行動理解におけるこうした親の視点の重要性を強調し続けてきた。そして, 家族の研究計画では, 親の発達的関心を組み込んだ研究, とくに結婚後10数年後の, 身体, 達成, 同一性について検討すべきであると述べている (Hill, 1983)。

研究の視点と方向性は異なるが, Elder, Caspi, & Burton (1988) も, 家族における相互依存の生活のダイナミックスに注目する。青年の経験に関する研究は, 青年の個体内変化に着目して児童期の兆候と成人期の結果に注意を拂うことが多いが, 重要な他者—両親, 祖母, 親戚, 成人の友人の人生周期における経験が青年発達にどのような影響をもたらすのか, その意味の理解に無頓着であることを指摘する。これは, 青年の経験が他世代へも効果をもつことを言及したものである。

こうした視点が強調されているものの, 多くの研究者は, 成人発達と中年期の精神健康 well-being を青年発達と親子関係の研究と切り離し独立させて検討する。青年に視点をあてた研究では, 子どもは青年期になるにしたがって容貌は大人らしくなり, 仲間の活動とかかわり, autonomy と独立を欲して行動する。初期青年期は親子の葛藤の多い時期である, などと指摘する。中年期の研究では, 多くの成人にとって, この時期は心理的激動の時期ではないが, 夫婦間の満足は減少し, 人生再評価の時期であり, 身体的, 心理的自己を内省する stress の時期としてとらえている。

Silverberg & Steinberg (1987) は, 青年発達と親子関係の性質は, 中年成人としての親の自己ならびに精神健康と関連すると考え, 両者の関係を検討している。

精神健康—中年の同一性への関心, 自尊感情, 生活の満足, 心理的徵候ならびに親子の葛藤水準は, 親の報告により, 親に対する情緒的 autonomy は子どもの報告から得ている。10~15歳の第一子を対象とする129組の intact 家族である。結果をみると, 中年の親の同一性への関心—人生再評価の感情—は, 同性の子どもの情緒的 autonomy の水準とプラスに関連すること, 母の精神健康は, 親子の葛藤の強さとマイナスに関連することなどがわかる。

この研究では, 青年の情緒的 autonomy, 親子間の葛藤の水準が中年期の親の自己と精神健康に影響するのか, 逆の関係なのかはわからない。しかし, 親子関係におけるある種の変容は, 中年期の親にとって意味をもつ

ことがわかる。

青年期の親子関係の変容と親子の交渉過程を理解するために、こうした親子の共変関係に関する研究は緒についたところであるが、今後一層こうした視点からの研究が望まれる。

要 約

青年期とその家族関係ならびに親子関係は、従来、疾風怒濤、葛藤の様相を呈するものとされてきた。しかし、われわれの手許にある、これらに関する経験的資料をみる限り、こうした視点は支持されるというよりむしろ否定される見解といえる。青年期の親子関係の研究は、親子の葛藤と分離を把握する独立と青年の心理的過程を明らかにする概念のみからするのではなく、子どもの時期からつくりられてきた親子の関係性をも包みこむ概念と視点からなされている。Hill が主張したように、青年期の親子関係は、初期青年期から成人初期にかけて変容する。親子の関係は、生涯を通して続く永続的な関係であるが、それは一方向的な権威の型から相互性へと再交渉されることによって変容するものである。

こうした変容の関係と過程を重視する、親子関係の新しい視点として、1. 初期青年期の経験、2. 家族の相互作用が青年の competence に果たす役割、3. 親子・仲間間の文脈とかかわる研究および4. 親子の共変関係に関する研究について指摘した。1. の初期青年期の研究では、この時期に家族の相互作用に変化が生じていることを理解できるが、Hill らの研究では、思春期的变化を独立変数として扱い、家族相互作用の過程を観察により実証した点で、青年心理学的にみて高く評価される。家族の相互作用の研究として、2. の individuation とかかわる研究は1. と一括することができるが、Grotevant らの研究では、親と子の関係において individuality と connectedness がともにみられることが青年の個人差の一因であり、competence に役割を果たすことがわかる。Hill らの研究は、初期青年を対象として青年期初期の親子の変容過程を明らかにしたのに対して、Grotevant らの研究は、高校生を対象としており、青年初期の変容が比較的安定したと思われる親子関係の変容過程を明らかにしたものである。2つの学派の研究は、ともに親子関係の変容過程を把握する研究として位置づけることができる。さらに、Grotevant らの研究は、個性把握の一視点を提供したものと評価することもできる。3. 青年の親と仲間の関係の context に関する研究と4. 青年期の親子の共変関係に関する研究は、研究の現状からみると、研究は始まったばかりの印象である。しかし、青年期の親子関係の変容過程は、親子の相互性

と交渉の過程を明らかにすることであるので、両研究を進めることは、これらの過程を正確に把握できるし、何よりも日常生活の水準の理解が深められていく。仲間との関係に関する研究は、青年理解にとって緊急の課題となっている。また、親子の共変関係の研究は、生涯発達における親子関係の変容過程の基礎として位置づけることができる。

すでに報告したように、わが国における青年期の親子関係研究は、その多くが質問紙法によって、親子の信念、認知、態度の差異や親の養育態度などを明らかにしている(久世・平石・辻井, 1991)。これらの研究をアメリカの青年心理学ならびに親子関係の研究と比較すると、アメリカの諸研究では、Grotevant (1987) の Toward a Process Model of Identity Formation にみられるように、process 志向の研究が際立っていることを感ずるものである。

文 献

- Ainsworth, M. D. S. 1979 Infant-mother attachment. *American Psychologist*, 34, 932-937.
- Alexander, J. F. 1973a Defensive and supportive communications in family systems. *Journal of Marriage and the Family*, 35, 613-617.
- Alexander, J. F. 1973b Defensive and supportive communications in normal and deviant families. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 40, 223-231.
- Bandura, A. 1964 The stormy decade: Fact or fiction? *Psychology in the Schools*, 1, 224-231.
- Bandura, A., & Walters, L. H. 1959 *Adolescent aggression*. New York: Roland Press.
- Baumrind, D. 1968 Authoritarian vs. authoritarian parental control. *Adolescence*, 3, 255-272.
- Baumrind, D. 1991 Parenting styles and adolescent development. In R. M. Lerner, A. C. Petersen, & J. Brooks-Gunn (Eds.), *Encyclopedia of adolescence*. Vol. II. New York: Garland Publishing. Pp. 746-758.
- プロス P. 野沢栄司(訳) 1971 青年期の精神医学
誠信書房 (Blos, P. 1962 *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. New York: Free Press.)
- Bosma, H. A., & Gerrits, R. S. 1985 Family functioning and identity status in adolescence.

青年期の親子関係研究の展望

- Journal of Early Adolescence*, 5, 69-80.
- Brittain, C. V. 1963 Adolescent choices and parent-peer cross-pressures. *American Sociological Review*, 28, 385-391.
- Coleman, J. S. 1961 *The adolescent society*. New York: Free Press.
- Cooper, C. R., & Ayers-Lopez, S. 1985 Family and peer systems in early adolescence: New models of the role of relationships in development. *Journal of Early Adolescence*, 5, 9-21.
- Cooper, C. R., & Grotevant, H. D. 1987 Gender issues in the interface of family experience and adolescents' friendship and dating identity. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 247-264.
- Douvan, E., & Adelson, J. 1966 *The adolescent experience*. New York: Wiley.
- Elder, G. H., Caspi, A., & Burton, L. M. 1988 Adolescent transition in developmental perspective: Sociological and historical insight. In M. R. Gunnar, & W. A. Collins (Eds.), *Development during the transition to adolescence. Minnesota symposia on child psychology*. Vol. 21. Hillsdale: Erlbaum Associate. Pp. 151-179.
- Elkind, D. 1967 Egocentrism in adolescence. *Child Development*, 38, 1025-1034.
- Ferreira, A. J. 1963 Decision making in normal and pathological families. *Archives of General Psychiatry*, 8, 68-73.
- Foster-Clark, F. S., & Blyth, D. A. 1991 Peer relations and influences. In R. M. Lerner, A. C. Petersen, & J. Brooks-Gunn (Eds.), *Encyclopedia of adolescence*. Vol. II. New York: Garland Publishing. Pp. 767-771.
- フロイト A. 外林大作(訳) 1958 自我と防衛 誠信書房 (Freud, A. 1936 *Das Ich und Abwehrmechanismen*. Internationaler Psychoanalytischer Verlag.)
- Freud, A. 1968 Adolescence. In A. E. Winder, & D. L. Angus (Eds.), *Adolescence contemporary studies*. Van Northrand Reinhold Company.
- Grotevant, H. D. 1987 Toward a process model of identity formation. *Journal of Adolescent Research*, 2, 203-222.
- Grotevant, H. D. & Cooper, C. R. 1986 Individualization in family relationships: A perspective on individual differences in the development of identity and role-taking skill in adolescence. *Human Development*, 29, 82-100.
- ホール G. S. 元良勇次郎・中島力造・速水滉・青木宗太郎(訳) 1910 青年期の研究 同文館 (Hall, G. S. 1904 *Adolescence: Its psychology and its relations to physiology, anthropology, sociology, sex, crime, religion, and education*. New York: Appleton.)
- Hartup, W. W. 1979 The social worlds of childhood. *American Psychologist*, 34, 944-950.
- Hartup, W. W. 1983 Peer relations. In Mussen (Ed.), *Handbook of child psychology*, 4th ed. Vol. 4: Hetherington (Ed.), *Socialization, personality, and social development*. New York: Wiley. Pp. 103-196.
- Hartup, W. W., & Overhauser, S. 1991 Friendship. In R. M. Lerner, A. C. Petersen, & J. Brooks-Gunn (Eds.), *Encyclopedia of adolescence*. Vol. I. New York: Garland Publishing. Pp. 378-384.
- Hauser, S. T., Powers, S. I., Moam, G., Jacobson, A. M., Weiss, B., & Follansbee, D. J. 1984 Familial contexts of adolescent ego development. *Child Development*, 55, 195-213.
- Hetherington, E. M., Stouwie, R., & Ridberg, E. H. 1971 Patterns of family interaction and child-rearing attitudes related to three dimensions of juvenile delinquency. *Journal of Abnormal Psychology*, 77, 160-176.
- Hill, J. P. 1980 The Family. In M. Johnson (Ed.), *Toward adolescence: The middle school years. The seventy-ninth yearbook of the national society for the study of education*. Chicago: University of Chicago Press. Pp. 32-55.
- Hill, J. P. 1983 Early adolescence: A research agenda. *Journal of Early Adolescence*, 3, 1-21.
- Hill, J. P. 1986 Attachment and autonomy during adolescence. In G. Whitehurst (Ed.), *Annals of Child Development*. Vol. 3. JAI Press. Pp. 145-189.
- Hill, J. P. 1987 Research on adolescents and their families: Past and prospect. In C. E. Irwin, Jr.

資料

- (Ed.), *Adolescent social behavior and health. New directions for child development*, No.37. San Francisco : Jossey-Bass.
- Hill, J. P., Holmbeck, G. N., Marlow, N., Green, T. M., & Lynch, M. E., 1985a Menarcheal status and parent-child relations in families of seventh-grade girls. *Journal of Youth and Adolescence*, 14, 301-316.
- Hill, J. P., Holmbeck, G. N., Marlow, N., Green, T. M., & Lynch, M. E., 1985b Pubertal status and parent-child relations in families of seventh-grade boys. *Journal of Early Adolescence*, 5, 31-44.
- Jacob, T. 1974 Patterns of family conflict and dominance as a function of child age and social class. *Developmental Psychology*, 10, 1-12.
- Kandel, D. B. & Lesser, G. S. 1975 Parent-adolescent relationships and adolescent independence in the United and Denmark. In H. D. Thornburg (Ed.), *Contemporary adolescence: Readings*. Second Edition. Brooks: Cole.
- 久世敏雄・平石賢二・辻井正次 1991 青年心理研究における現状と課題（I）名古屋大学教育学部紀要一教育心理学科一, 37, 65-106.
- Loevinger, J. 1976 *Ego development: Conceptions and theories*. San Francisco: Jossey-Bass.
- マーラー M. S. 他 高橋雅士・織田正義・浜畑紀(訳) 1981 乳幼児の心理的誕生 黎明書房 (Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. 1975 *The psychological birth of the human infant*. New York: Basic Books.)
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- Matteson, D. R. 1977 Exploration and commitment: Sex differences and methodological problems in the use of identity status categories. *Journal of Youth and Adolescence*, 6, 353-374.
- Meissner, W. W. 1965 Parental interaction of the adolescent boy. *Journal of Genetic Psychology*, 107, 225-233.
- Montemayor, R. 1983 Parents and adolescent in conflict: All families some of the time and some families most of the time. *Journal of Early Adolescence*, 3, 83-103.
- Montemayor, R., & Flannery, D. J. 1991 Parent-adolescent relations in middle and late adolescence. In R. M. Lerner, A. C. Petersen, & J. Brooks-Gunn (Eds.), *Encyclopedia of adolescence*. Vol. II. New York: Garland Publishing. Pp.729-734.
- Murphrey, E. B., Silber, E., Coelho, G. V., Hamburg, D. A., & Greenberg, I. 1963 Development of autonomy and parent-child interaction in late adolescence. *American Journal of Orthopsychiatry*, 33, 643-652.
- Offer, D. 1969 *The psychological world of the teenager*. New York: Basic Books.
- Offer, D., & Church, R. B. 1991 Turmoil, adolescent. In R. M. Lerner, A. C. Petersen, & J. Brooks-Gunn (Eds.), *Encyclopedia of adolescence*. Vol. II. New York: Garland Publishing. Pp.1148-1152.
- Offer, D., Ostrov, E., & Howard, K. I. 1981 *The adolescent: A psychological self-portrait*. New York: Basic Books.
- Rutter, M. 1980 *Changing youth in a changing society: Patterns of adolescent development and disorder*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- Rutter, M., Graham, P., Chadwick, O., & Yule, W. 1976 Adolescent turmoil: Fact or fiction? *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 17, 35-56.
- Selman, R. L., Shorin, M. Z., Stone, C., & Phelps, E. 1983 A naturalistic study of children's social understanding. *Developmental Psychology*, 19, 82-102.
- Selman, R. L., & Demorest, A. P. 1984 Observing trouble children's interpersonal negotiation strategies: Implications of and for a developmental model. *Child Development*, 55, 288-304.
- Silverberg, S. B., & Steinberg, L. D. 1987 Adolescent autonomy, parent-adolescent conflict, and parental well-being. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 293-312.
- Sroufe, L. A. 1979 The coherence of individual development. *American Psychologist*, 34,

- 834-841.
- Sroufe, L. A. 1983 Infant-caregiver attachment and patterns of adaptation in preschool: the roots of maladaptation and competence. In Perlmutter (Ed.), *Minnesota symposia on child psychology* Vol.16. Hillsdale: Erlbaum.
- Steinberg, L. D. 1981 Transformation in family relations at puberty. *Developmental Psychology*, 17, 833-840.
- Steinberg, L. D. 1991 Parent-adolescent relations. In R. M. Lerner, A. C. Petersen, & J. Brooks-Gunn (Eds.), *Encyclopedia of adolescence*. Vol. II. New York: Garland Publishing. Pp. 724-728.
- Steinberg, L. D., & Hill, J. P. 1978 Patterns of family interaction as a function of age, the onset of puberty, and formal thinking. *Developmental Psychology*, 14, 683-684.
- White, K. M., Speisman, J. C., & Costos, D. 1983 Young adults and their parents: Individuation to mutuality. In H. D. Grotevant, C. R. Cooper, (Eds.), *Adolescence Development in the Family*. New Directions for Child Development No. 22 Sanfrancisco: Jossey-Bass.
- Youniss, J., & Smollar, J. 1990 Self through relationship development. In H. Bosma, & S. Jackson (Eds.), *Coping and self-concept in adolescence*. Berlin Heidelberg: Springer-Verlag.

(1992年8月26日受稿)

ABSTRACT

Research on Adolescents and Their Parents:Past and Prospect

Toshio KUZE and Kenji HIRASHI

In the present article, researches on adolescent-parents relations and on the transformation in their relations were reviewed. And then, past trends of them and future perspective were examined.

Major contents taken up were as follows:

- I Is adolescence a period of "Strum und Drang"?
- II Research on adolescent-parents relations.
- III Research on the process of transformation in the adolescent-parents relations.
 1. Research on early adolescence.
 2. The function of family interaction process affecting adolescent competence.
 3. Issue in the interface of family experience and adolescents' friendship.
 4. Dual viewpoint on family relationship: development of adolescent and development of their parents.

Remarkable research studied the following psychological constructs, namely, "individuation process (containing both individuality and connectedness)", "negotiation skills", "mutuality in the adolescent-parents relations", and so on.

In conclusion, the research dealing with the quality of adolescent-parents relations and the process of their transformation is needed.